

東日本視察交流記（10） 被災地・東松島市矢本町へ
6月13日（月）（その3）

13時ごろ、東松島市の旧鳴瀬町庁舎に到着、農政課のOさんを訪ねた。新聞で当市の大曲地区、立沼地区について報道されていたので、あらかじめ電話で農家の方々への紹介をお願いしていたのである。

Oさんに現地まで案内してもらった。

大曲地区の耕地には、船や大型ブイがまだ残っていた。



Tさんが話をしてくれた。

大曲の全耕地は150ha、そのうち110haで圃場整備の計画があった。あらためてどうするかを決めなければならなかった。4月26日に皆で話しをし、「やはり農業をしたい、整備しよう」ということになった。先週も30人ほど集まった（105人のうち）。

ただ、防波堤をどうするか、地盤沈下（50~80cm）をどうするか、みな農機具もない状況で本人負担ができない、という課題が残っている。市は前向きに対応しているようだ。

震災前、息子たちの世代が6~7人集まっていた。震災10日前にも「若者の集い」を開いたばかりだ。しかし、以前に研修をさせてもらっていた名取や南相馬の農場も震災でつぶれてしまった。いまは農外就労をみつけるほかない。

津波被害のなかった他地域の耕地を借りるという取り組みが一部に始まっているが、農業再開の足がかりは難しい。「法人化の方向も考えなくては」とTさんは言った。

佐々木さんも、内陸部の元気な農業法人もいるから、その人たちとも連携してやってみましょう、また連絡してください、と声をかけた。

お礼を言って別れた。

こんどは立沼地区へ移動した。耕地の状況は同じような状況だ、船がまだ乗り上げたままだ（写真左下）。

立沼の集会所に着いた。「兵庫」の文字を染めた上着の人たちが周囲を一生懸命きれいにしていた。「兵庫はどちらからですか」と声をかけた。「兵庫の天理教です」とにこやかな顔が答えた。「そうですか、ご苦労さまです。」

3人の農家の方が待っていてくれた。

立沼では75戸で集団移転を要求している。農地も近くで確保できるようにと。



被災した土地を国が買い上げや借り上げをして、新しい農地は国有で代替してほしい。虫がよすぎると言われるかもしれないが、ここは今まで2度も国のために集団移転をしてきた。最初は、昭和14年、海軍がここに移転してきたとき、2度目は昭和32年、航空自衛隊松島基地の滑走路が、プロペラ機からジェット機になって拡張されたとき。今も騒音区域で苦しい生活をしている。今度は、国、防衛庁がこれまでの我々の協力に報いてくれてもよいと思っている、と。

Oさんによると、市の方は復興計画を出せるところまで来ている、なんとか要求に応える方向で動いている、と。東松島市は、従来人口4万3千人、震災の死者1050人、行方不明200人、現在人口4万1千人という。それほど人口は減っていない。人々の地元愛着感が強いのか、市ががんばっているのか。

県の被災農家再開支援事業が、1億円予算の1万人雇用で行われるという。田圃の細かいがれきや雑草などを取り除く作業で7月から来年2月まで、日当8700～12000円、国100%の事業だという。

Aさんは「事業は遅すぎる。若いものは3か月も経つとみな出て行って仕事をしている」と嘆く。農業従事していた息子二人もすでに農外就労をしているのだ。Aさん自身は、営農の県外受け入れに応募するか、抱えているローンで自己破産した方が早いか、迷っている、という。いまは、新聞配達をしながら、なんとか

近隣の村で借りることができた30aの畑でミニトマトやミズナづくりを始めた。トラクターは借りて、管理機のみ買って。「ヘドロの掻きだしは疲れるが、畑は疲れぬ」と。震災前は、ミニトマト、ミズナを1200坪(40a)、水田を2ha、転作大豆をやっていて、JAに出していた。

今回の震災後、何人かでJAに何かサポートしてもらえないかと訪ねて行ったが、5千万円までの事業に1/2補助をします、これまで5人共同が条件だったが3人共同に緩和します、との対応であった。自前の資金などあるはずもなく、「気持ち10歩後退した」とAさんは言う。そのうえ、請求書を最初に送りつけてきたのは農協。ほかの取引先は見舞いにタオルの1本もまず持ってきてくれたが、農協は3月28日付の請求書を送りつけ4月までに払え、と。

声を荒げてというのではまったくなく、やりきれぬ気持ちが思わずあふれてくるのである。

Bさんは露地野菜をつくってシキサイカンに出荷している。Cさんも露地野菜でねぎの専業である。Aさんの言葉を静かに聞いていた。同じ思いなのであろう。

たしかに農協の活動は、今回の震災救援、復興の中でほとんど登場してきていない。ほんらいの協同組合であればやることはたくさんあるだろう。近隣地域の耕地の貸借をあっせんする、被害のない組合員から使っていない農機具を抛出してもらって被災農家に供与する、塩害で荒れた耕地に栽培可能な植物を実験栽培するなどなど。

6月25日に支部の集まりがまたあるという。「よろしければ連絡してください」と佐々木さんが言い、「いろいろお話ししてくださってありがとうございました」とあいさつして、集会所をあとにした。

ずっと付き合ってくださったOさんにもお礼を言い別れた。

そして、登米市米山のおとちグリーンステーションに車を向けた。

(続く)